

児童生徒の道徳性を育むための問題解決的な学習の工夫

道徳研究会議

研究員 奈良 沙織（川崎市立渡田小学校） 後藤 香織（川崎市立千代ヶ丘小学校）
丸山 真一郎（川崎市立川崎高等学校附属中学校）

指導主事 水之江 忠

I 主題設定の理由

平成 27 年 3 月 27 日に「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」が一部改正された。この学習指導要領には、道徳の特別の教科化を踏まえて、小学校、中学校ともに「発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること」が示されている。平成 27 年度道徳研究会議では、「特別の教科 道徳」（以下道徳科）の授業を見据えた道徳の授業展開と新たな指導方法である問題解決的な学習の授業展開について研究を行った。問題解決的な学習については、1 年間の研究では十分ではなく、他の指導方法も考える必要があるとの結論に至った。そこで、道徳の授業における問題解決的な学習の指導方法について、さらに研究を深め実践で活用できるものにしたいと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

（1）平成 27 年度道徳研究会議の「問題解決的な学習」の授業展開を分析する

平成 27 年度道徳研究会議の「問題解決的な学習」の授業展開について分析し、課題等を踏まえ、「問題解決的な学習」の授業展開を新たに考える際の視点について考える。

（2）「問題解決的な学習」の新たな授業展開を探る

導き出した視点を踏まえ、新たな授業展開について研究する。その際、授業実践を繰り返す中で、効果的な授業展開について検討する。

2 研究の実際

（1）平成 27 年度道徳研究会議の「問題解決的な学習」の授業展開について

昨年度の道徳研究会議では、小学校と中学校の「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」に示されている問題解決的な学習をもとに授業展開を考えた。導入では「道徳的価値の想起」、展開では「道徳的な問題の状況の分析」「問題に対して解決策を構想する」「各自で道徳的価値に関わる自分の在り方を振り返り交流する」、終末では、「教師の説話、私たちの道徳等でまとめる」と考えた。

この授業展開を見直すと、次の 3 つの点で再考の余地があると考えた。1 つ目は道徳的な問題に目を向けることが比較的容易にできる教材での授業展開であったこと。2 つ目は子どもたちがもった問題意識を明確に表していなかったこと。3 つ目は問題の解決の話し合いの仕方が漠然としていたこと。これらのことを踏まえ、今年度の問題解決的な学習の授業展開を考えることとした。

（2）「問題解決的な学習」の新たな授業展開について

①教材について

昨年度の問題解決的な学習では、道徳的な問題について比較的容易に目を向けることができる教材での授業展開であったことが見えてきた。昨年度取り組んだ授業展開における道徳的な問題は、

『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について」（平成28年7月）に示されている「道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題」「道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題」に分類されるのではないかと考える。今年度は、そのような教材でない場合でも問題解決的な学習の授業を展開できるのかを考えていくこととした。そこで、『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について」（平成28年7月）に示されている「道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題」「複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題」と関わるような教材を探すこととした。このような教材は、例えば、「問題行動と言えないが問題行動になりそうな行動があり、主人公が悩んでいるが、最終的には、良いと思う方向に進んでいくような教材」であるのではないかと考えた。そのような教材に合わせて考えた問題解決的な学習の授業展開が次の表1である。 表1 問題解決的な学習の授業展開

導 入		道徳的価値の想起、個人的な経験や具体的な事例から道徳的価値を考える
展 開	問題意識をもつ	道徳的な問題の状況の分析
	問題の解決を図る	問題に対して解決するための話し合いの方法を構想する
	価値を自分との関わりで考える	各自で道徳的価値に関わる自分の在り方を振り返り、交流する
終 末		道徳的価値を実現することの良さや難しさなどを確認して、今後の発展につなげられるようにする

②共通の問題意識の設定について

児童生徒が考えたすべての問題意識について解決を図ろうとすると、1時間の授業で取り扱うことは難しい。そこで、問題意識を焦点化するために「不思議に思ったこと」「疑問に思ったこと」等を問いかけるようにした。このようにすることで、児童生徒が共通して考えていく問題意識が明確になり、そのことについて解決を図るような話し合いを行うことが可能になると考えた。本研究会議ではこのことを「共通の問題意識」として表すこととした。この言葉は、神奈川県公立中学校教育研究会道徳部会の学習指導案で使われている言葉であるが、本研究会議では児童生徒が話し合いによって焦点化した問題意識を「共通の問題意識」とすることとした。

③問題の解決を図る話し合いについて

問題の解決を図る話し合いでは、自分との関わりで考えて話し合うことができるように考えた。このことにより、問題を解決するとは何を言えば正解になるかということではなく、自分はその問題をどのように捉え、それについてどのように考えるのかということをも他者の考えも踏まえながら考えられたのではないかと考える。

④問題の解決を図るための話し合いの方法について

問題の解決を図る話し合いを効果的なものとするため、次の3つの話し合いの方法について取り組んでみることにした。

1つ目は、「動作化を行い問題場面について考える」方法である。それぞれの場面で動作化を取り入れ、主人公の気持ちの変容に気づき、共感することで問題の解決を図るようにした。

2つ目は、「両方の良さを考える」方法である。主人公が迷っている2つの事象のそれぞれの良さについて考える。その後、それぞれの良さがあるのに、それでもどちらかを選んだのはどうしてかと考えることで解決を図るようにした。

3つ目は、「問題となる2つの事象をもとに話し合う」方法である。どちらかの考えに優劣はつけられないが、討論形式での話し合いを本研究会議ではディベート的な話し合いとした。それぞれの立場の見方や考え方を知ること、自己の考えを深めることにつながると考えた。さらに、話し合い後にはこの問題を考える上で「大切なこと」は何かということまでを考えられるようにした。

(3) 検討した問題解決的な学習の授業展開についての検証

小学校1年生 検証授業①（動作化を行い問題場面について考える）

<授業の流れ>

主題名	「友達を想う心」 B（9）友情、信頼
教材名	「二わのひとり」 （学研 副読本 みんなのどうとく1年）
ねらい	心から友達のことを想う気持ちについて考え、友達となかよく助け合っていこうとする心情を養う。
導入	1. 友達との関わり方について振り返る。 ○友達とは、どんな人ですか。
展開	2. 教材を読んで話し合う。 問題意識をもつ ○どんなことを感じましたか。 ○みそさざいの行動で、不思議に思ったことはありませんか。 共通の問題意識の設定 みそさざいが、途中で一人きりでやまがらの家に行ったのは、なぜだろう。 問題の解決を図る ◎うぐいすの家へ行ったみそさざいが、途中で一人きりでやまがらの家へ行ったのは、どんな気持ちからでしょう。 3. 自分の生活をふりかえる。 価値を自分との関わりで考える ○友達のことを考えて、何かしたことはありますか。
	終末

※「◎」はねらいに関わる中心的な発問

<考察>

本教材における問題とは、「道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分と、そうできない自分との葛藤から生じる問題」である。明らかに友達に対して不誠実な行動をとっているわけではないので、児童には「解決すべき問題」としての認識はもちにくいと考えた。そこで、問題意識を焦点化するために「みそさざいの行動で不思議に思ったこと」を問い、児童の意識にゆさぶりをかけた。その結果、「どうして途中でやまがらの家に行ったのか。」「なぜ一人でいったのか。」という疑問があがり、共通の問題意識へとつながった。

振り返りで価値を自分との関わりで深く見つめるためには、「友達にしてもらった」ことではなく、「自分が友達のことを考えてしたこと」を問うべきであると考えた。この発問で継続したみとりをしたところ、前期の始めの頃は「お友達になろうと思いました。」と書いていた児童が、後期になると「逆上がりのできないお友達に、『私もやってあげるから、頑張っ。』と言いました。」と書くようになっていた。こうした児童が増えたことから、「友達のことを考えてしたこと」の行為が増えたり、具体的になったりと、深く変化していくことがわかった。

<問題の解決を図る話し合いについて>

○問題を解決するための手がかりになる、
構造的な板書

黒板全体を舞台にし、ペープサートを使ってパネルシアター風に資料を提示した。場面の状況理解はもちろんのこと、みそさざいの迷いや葛藤を視覚的に感じることができた。

黒板右に「うぐいすの家に行ったみそさざいの気持ち」



黒板左側に「やまがらのところへ行くことにしたみそさざいの気持ち」

○主人公の気持ちに共感するための動作化

みそさざいになりきって演じたり、それを見たりすることで、多様な感情や考えを引き出すことができ、解決の糸口となった。

迷いや葛藤、友達のことを考えて行動を起こした時の気持ちを実感



指導者がうぐいす役となり、迷いを誘うような投げかけをしたことで、より実感を伴って考えることができた。

小学校2年生 検証授業②（両方の良さを考える）

<授業の流れ>

主題名「あきらめずに頑張る」 A（5）希望と勇気、努力と強い意志 教材名「ぼんたと木のみ」 （文溪堂 2年生のどうとく） ねらい 自分がやらなければならないことは、しっかりとやり遂げようとする心情を養う。	
導	1. 日頃の生活について思い起こす。 ○今、みなさんが頑張っていることはありますか。
展	2. 教材を読んで話し合う。 問題意識をもつ ○話を聞いて、ぼんたのことで思ったことを教えてください。
	共通の問題意識の設定 ぼんたは、どうしてなまけっけの世界から戻ってきたのだろう。
開	問題の解決を図る ◎どちらも良さがあるのに、どうしてぼんたはもとの世界に戻ってきたのでしょうか。 3. 自分の生活をふりかえる。 価値を自分との関わりで考える ○みなさんも、本当はやめたいと思ったけれども、あきらめずに頑張っていることはありますか。
終末	4. まとめをする。 ○「私たちの道徳」P. 16の二宮尊徳を紹介します。

※「◎」はねらいに関わる中心的な発問

<考察>

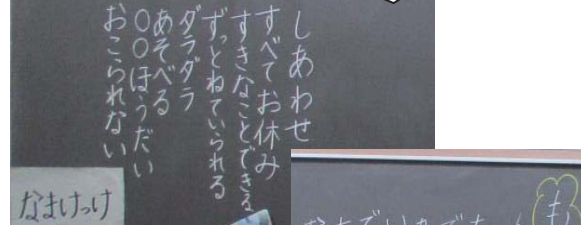
教材の読み聞かせの後、児童は感想を出し合い全体で共有した。児童からは「なまけっけの世界にずっといればよかったのに。」という意見や「どうして元の世界に戻ろうとしたのか。」という疑問が生まれた。児童から出た問題意識を整理していくと、「なぜ、ぼんたは元の世界に戻ったのだろうか。」ということが共通しているように感じられた。そこで、「ぼんたは、どうしてなまけっけの世界から戻ってきたのだろうか。」という共通の問題意識を設定することとした。

また、元の世界に戻るだけでなく、「なまけっけの世界にそのまま残っても良かったかもしれない。」と考える児童もいた。このことから、「なまけっけの世界に留まった場合」と「元の世界に戻った場合」の2つの視点からそれぞれ何が良いのかについて考えを出し合うことにした。なまけっけの世界に留まることは、自分の好きなことだけをして過ごしたり、苦手なことから逃げたりできるという自分にとって都合のいいことという意味での良さである。元の世界に戻る場合の良さは、自分で一度決めたことを成し遂げると、今までできなかったことができるようになるかもしれないという内面的な向上が期待される良さである。

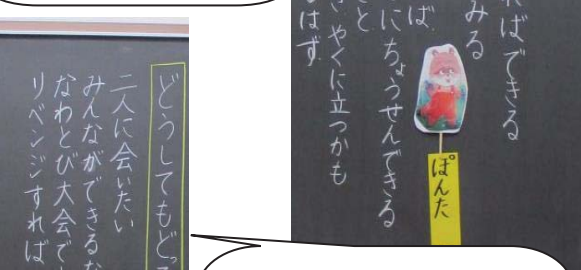
それぞれの世界で考えられる良さを出し合った後に、改めて「なぜ戻ろうとしたのか」を話し合った。児童からは、「頑張ろうという気持ちが強いので戻ってきた。」や「はじめに頑張ろうと自分で決めたのだから元の世界に戻った。」などの考えが出た。2つの異なる世界を比べたことにより、苦手なことから逃げようとする弱い心は誰にでもあるということに共感しながらも、はじめにやろうと決めたことにあきらめずに取り組むことで、それまでできなかったことができるようになるかもしれないという意志を貫く良さや可能性を考える児童の姿が見られた。

<問題の解決を図る話し合いについて>

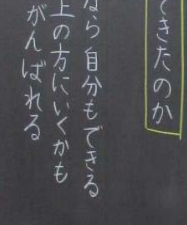
なまけっけの世界に残った場合、
 どのようなことが考えられるか
 （自分にとっては都合がよい）



元の世界に戻った場合に考えられること



2つの世界を比べた後、
 中心発問で問うことにより、自分本位の考えよりも自分の意志を貫く良さを
 選んだことに気付いた。



中学校3年生 検証授業③（問題となる2つの事象をもとに話し合う）

<授業の流れ>

	主題名「人間の弱さの克服」 D (22) よりよく生きる喜び 教材名「天井の穴」 (神奈川県 の 道徳 きらめき 3) ねらい 人間としての気高さに向けて努力していかうとする態度を育てる。
導入	1. 『私たちの道徳』P. 121 の「人間として生きる喜び」のページを提示する。 ○「8つの心」の中で、今の自分が気になるワードを選び、その理由を発表しましょう。
展開	2. 教材を読んで話し合う。 問題意識をもつ ○主人公の言動に対してどう思いますか。 *生徒の感想を短冊黒板にまとめ吟味する。 共通の問題意識の設定 友人との関係を気にして、自分の軽率な行いについて素直に謝罪できない主人公について考える。 問題の解決を図る ○「穴を開けた時にすぐに先生に言いに行くのか、友だちとの関係を守るのか」について話し合しましょう。 ◎この問題を考える時に「大切なこと」は何でしょうか。 3. 自分の生活をふりかえる。 価値を自分との関わりで考える ○これまでの経験を振り返り、自分の心の中の葛藤に打ち勝てたことを書きましょう。
終末	3. まとめをする。 ○『私たちの道徳』P. 125 の言葉を読みましよう。本日の授業の感想を書きましよう。

※「◎」はねらいに関わる中心的な発問

<考察>

「問題となる2つの事象をもとに話し合う」方法として、ディベート的な話し合いに取り組んだ。検証授業ではクラス座席の配置を便宜的に2つに分けて行った。授業後、最初にもった考えと別の立場で討論に参加して、「反対の立場の気持ちがわかった。」との感想や「実際に最初の考えから立場を変えた。」という感想があった。そのような感想をもったということは、多角的・多面的に考えたという証になるのではないだろうか。

また、話し合い後にこの問題を考える上で「大切なこと」を生徒に聞いた。このことを聞くことで、話し合ったことを振り返って考え、賛否や自分の考えを言うだけで終わらないように工夫した。つまり、吟味された「問題」について話し合っていると、それぞれの立場に共通するテーマが存在することに気づく。検証授業では、二律背反する議題の裏には、「自分の行為に真摯に向き合えるか」という命題が隠れている。そこに着目するために、話し合い活動全体を包括するような「大切なこと」を探るようにした。最初にもった考えと同じ立場に配置された生徒も、「大切なこと」を考えることにより、自らの考えが明確になっていた。自分の考えを客観的に相手側に伝えようとするれば、その根拠や理由を考える必要がある。このことは思考の深化が行われていると言えるのではないだろうか。

<問題の解決を図る話し合いについて>

○問題の解決を図るためのディベート的な話し合い



クラスを便宜的に2つに分け実施。
2つに分ける前に自分の意見を書いておく。

○ディベート的な話し合い後に、「大切なこと」を探る



話し合い活動が単なる意見交換に終始してしまったり、ねらいから外れた話し合いになったりしないようにするために、話し合いの後に「大切なこと」について考えられるようにした。
生徒からは「克己心」というキーワードが出た。この言葉は導入部において提示した『私たちの道徳』のページに載っていた語である。導入部と展開部とを関連付けるように授業の構想を練ることも必要になってくるであろう。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果について

(1) 道徳的な問題との関わりについて

『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(平成28年7月)に示されている道徳的な問題のうち、平成27年度道徳研究会議では「道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題」「道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題」、今年度は「道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題」「複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題」の授業展開を考えた。昨年度から今年度にかけて、これら4つの道徳的な問題と関わった授業展開について考え実践に取り組むことができた。

(2) 共通の問題意識の設定について

児童生徒が教材から問題意識をもつ過程で複数の問題意識が表れることがある。そこで、何について考えるのかを明確にするために「共通の問題意識」を設定することとした。これにより、児童生徒は話し合う内容が明確になり、具体的に自分の考えをもって話し合うことができた。

(3) 問題の解決を図る話し合いについて

①話し合いの方法について

問題解決の際の効果的な話し合いの方法を検討し3つの話し合いの方法を考えた。問題解決的な学習を行うときにどのような話し合いの方法があるのかを示すことにつながったと考える。

②話し合いの時間の確保について

問題解決的な学習では、話し合いの時間を十分に確保することが必要である。そのため、短時間で児童生徒の問題意識が明確になるように工夫した。このことは、自分の考えに対する他者の考えを聞いたり他者の考えから自分の考えを深めたりするなど、多面的・多角的に考える時間を確保することにつながったと考える。

③ディベート的な話し合いの方法について

ディベート的な話し合いでは、様々な考えが出て意見交換になってしまうことが想定された。そこで、話し合ってきたことで「大切なこと」はどのようなことかを問うこととした。児童生徒が考えた共通の問題意識の中にある道徳的価値について考えられるようにすることで、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を育てることにつながったと考える。

2 課題について

1つ目は話し合いについてである。ディベート的な話し合いの時など、2つ以上の道徳的価値等が関わっているときの話し合いでは、話し合ってきたことで「大切なこと」はどのようなことかを聞いた。さらに、有効な発問の仕方を考えていきたい。

2つ目は、問題意識をもつことについてである。問題解決的な学習では、児童生徒が自ら問題意識をもって話し合うことが大切であると考え。その反面、児童生徒が問題意識をもてるまでの過程で時間がかかる場合があった。話し合いに時間を確保できるように、問題意識をもつまでの時間を短くする工夫についてさらに考えていきたい。

本研究会議で検討した問題解決的な学習の授業展開は一つの方法に過ぎない。今後も新たな問題解決的な学習の授業展開について考えていきたい。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をくださった先生方、研究をご支援してくださった研究員所属校の校長先生ならびに教職員の皆様に心から感謝申し上げます。